

## 【論文】

# 宗教系私立学校における宗教科、特別活動、生徒指導を通じた道徳教育 —学習指導要領の検討と事例研究をもとに—

京都大学大学院生 松本 圭将

## 序

近年、いじめを苦にした児童生徒の自殺や、少年犯罪の発生を理由として道徳教育の重要性が社会や政策レベルにおいて主張されてきた。第二次安倍内閣における私的諮問機関である教育再生実行会議は、「いじめ問題等への対応について（第一次提言）」において、道徳の教科化を提案した。その結果として「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）が平成 29 年度告示の中学校学習指導要領において設置されることとなった<sup>1</sup>。

このような道徳教育が求められる中で影響を受けるのは公立学校だけでなく私立学校においても同様である。ただし、私立学校については宗教教育とのかかわりを留意する必要があるといえる。学校教育法施行規則第 50 条第 2 項や第 79 条では、私立小学校・中学校において道徳科に代わって宗教科を置くことができる<sup>2</sup>とされている。このような制度を背景に、宗教系の私立学校では道徳教育が宗教教育と深いかかわりをもって展開されていると考えられる。私立中学校・高等学校における道徳教育について板倉は、宗教教育と中高一貫教育という点で特徴を有するとする。すなわち、宗教教育という点では、朝の短い時間を用いた礼拝や講話などを特定の宗教と関連付けて行うなどの活動を通して行われる、「宗教を通して人間としての在り方生き方や人間の尊厳について生徒に理解させるといった“宗教的情操”という観点からの授業内容」が特徴であるという。また中高一貫教育という観点では、従来の学校システムにおいて小学校と中学校において道徳科が設定されているように、小学校と中学校の間で連続性がある一方で中学校と高等学校では非連続的であると指摘する。そのうえで、「思春期という多感な時期を迎える中・高校生にとって、中高一貫教育は連続性という点での道徳授業の効果がより期待できる」とする<sup>3</sup>。

そのような宗教教育と中高一貫教育を特色に持つ私立学校での道徳教育であるが、その実態を検討した研究は十分に展開されてきたとはいえない。宗教科の授業での実践報告を中心とした研究や、李による宗教系私立学校の現代的課題を背景とした宗教家教員の葛藤を取り上げた研究<sup>4</sup>など、教科としての宗教科に着目した研究が多い。しかし、学習指導要領の総則において、「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと」とされていることを踏まえると、宗教科だけでなく教育課程内外の教育活動における宗教教育活動も視野に入れ、その中での道徳教育の在り方を検討していく必要がある。しかしながら、道徳教育と関連付けて宗教教育を取り上げ、学校教育全体を通じた実践を検討した研究は管見の限り少ない。神垣は国際理解教育について検討しており、人間尊重の精神や差別や偏見のない社会の実現など道徳教育の一部と国際理解教育が重複するとし、自身が勤務する学校で

の宗教教育を国際理解教育という観点で横断的に検討している<sup>4</sup>。しかし、「道德教育を宗教教育と読み替え」<sup>5</sup>て検討すると述べるように、道德教育と宗教教育を無条件に読み替える形で議論をしている。また、小幡は私立学校の特色という点から生徒指導や宗教教育を取り上げているが、道德教育という観点からの分析ではない<sup>6</sup>。本来、道德科の代替として宗教科が置かれている宗教系私立学校が、教科として明示的でない道德教育をどのように展開しているのか、すなわち宗教科や他教科・領域での宗教教育を行う際に、学習指導要領が目指す道德教育をどの程度実現できているのかということの検討が不足しているといえる。

そこで本稿では、実際の事例を手掛かりとして宗教科と特別活動、生徒指導の側面から宗教系私立学校における道德教育がどのように展開されているのかを検討する。キリスト教カトリック系の中高一貫の私立学校である洛星中学校・高等学校（以下、洛星中・高）を事例とする<sup>7</sup>。洛星中・高においては、道德科に代わり宗教科の授業が行われているほか、学校行事においても宗教行事が行われるなど、教育活動全体を通して宗教教育が展開されている。以上のような特徴は、板倉が指摘する私立学校における道德教育の特色を十分に反映した教育が展開される学校だといえる点で、事例として適切であると考えられる。

さて、これまで教育学において私立学校に関する研究は十分に展開されてこなかった<sup>8</sup>。私立学校での教育には建学の精神に基づく自律性や自主性が認められている中で、その教育が公教育制度の中でどのように展開されてきたのか、教育行政や制度の影響が私学教育に対してどのように及ぼされてきたのか十分に検討されてきたとは言い難い。道德科の代替科目として宗教科を置く学校において、道德教育がどのように行われているかを明らかにすることは、公教育のもつ普遍性と私立学校の自主性の境界を考察するうえで重要な意義を持つといえる。

本稿の構成であるが、まず道德教育の目的や諸領域とのかかわりについて、学習指導要領や学習指導要領の解説、生徒指導提要进行を概観し、学校教育全体での道德教育の在り方を整理する。次に、洛星中・高における宗教教育の特徴と、宗教科、宗教教育と関連した特別活動における道德教育、そして生徒指導上の工夫と実践について聞き取り調査の結果や公開資料や提供資料を基に、宗教系私立学校における道德教育の在り方を検討する。

## 1. 道德教育に関する諸文書の概観

### (1) 道德教育の教育課程内の位置づけ

平成 29 年中学校学習指導要領には、道德教育に関する記述は主に総則と「特別の教科 道德」にみられる。総則では、「第 1 中学校教育の基本と教育課程の役割」において、生徒に生きる力を育むために実現すべき事項の一つとして道德教育が掲げられる。ここでは、体験活動などとともに豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めるとされる。道德科を「要として学校の教育活動全体を通じて行うもの」とし、「各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行うこと」とする<sup>9</sup>。このように、学校教育における道德教育は、道德科以外の学校教育全体で行われることが目指されている。

特別活動とのかかわりについては、特別活動の全体計画や年間指導計画の作成において、「各教科、道德科、総合的な学習の時間などの指導との関連を図り、生徒による自主的、実践的な活動が助長され

るようにすること」とされている<sup>10</sup>。また、「中学校学習指導要領（平成29年告示）総則編解説」では各教科等において道德教育を行う際の配慮について言及があるが、特別活動は特に道德教育に果たす役割が大きい領域として示されている。

特別活動の目標には、「集団活動に自主的、実践的に取り組み」「互いのよさや可能性を發揮」「集団や自己の生活上の課題を解決」など、道德教育でもねらいとする内容が含まれている。また、目指す資質・能力には、「多様な他者との協働」「人間関係」「人間としての生き方」「自己実現」など、道德教育がねらいとする内容と共通している面が多く含まれており、道德教育において果たすべき役割は極めて大きい<sup>11</sup>

## （2）道德教育の目標と内容

「中学校学習指導要領（平成29年告示）」の総則においては、道德教育を進める上での留意点として、以下のように述べられている。

人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、平和で民主的な国家及び社会の形成者として、公共の精神を尊び、社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓ひらく主体性のある日本人の育成に資することとなるよう特に留意すること<sup>12</sup>

この目標に従い第3章においては、「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」としている。道德科において扱われる内容は表1のとおり整理されており、総則で示された留意点を踏まえたものとなっているといえる。特に、宗教教育との関連で議論されるのが「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の「畏敬の念」である。これは、「人間の力を超えた究極的・絶対的な価値をもつものに対する畏敬の念」<sup>13</sup>である宗教的情操の教育として捉えられてきた。例えば、小幡も宗教的情操教育が宗教系私立学校においてどのように展開されているのかを事例に基づいて検討しているが<sup>14</sup>、ここではあくまで宗教的情操教育に焦点が当てられており、道德教育という観点はない。また、平成29年度告示の学習指導要領の解説において宗教とのかかわりに言及された「C 主として集団や社会との関わりに関すること」についても、先の神垣の検討のように道德教育と宗教教育を無条件に読み替える形で取り上げられている。

特別活動の教育内容との関係においては、「中学校学習指導要領（平成29年告示）総則編解説」では、「例えば、自他の個性や立場を尊重しようとする態度、義務を果たそうとする態度、よりよい人間関係を深めようとする態度、社会に貢献しようとする態度、自分たちで約束をつくって守ろうとする態度、より高い目標を設定し諸問題を解決しようとする態度、自己のよさや可能性を大切にして集団活動を行おうとする態度などは、集団活動を通して身に付けたい道德性である」<sup>15</sup>という形で、道德教育の内容

と特別活動の内容のかかわりについて整理している（表2）。

### （3）生徒指導と道徳教育

生徒指導と道徳教育の関係について検討した豊泉は、「生徒指導と道徳教育は、両者とも訓育で行なわれ、学校の教育活動全体を通じて行なわれることに共通点がある。生徒指導は、道徳性の発達を基盤を培う指導として、児童生徒の健全な人格形成のための援助である。道徳教育も、児童生徒の道徳性を育成し、児童生徒の健全な人格形成を目標とする。生徒指導と道徳教育は、学校教育の各領域において、相互に関連し、補完し合う。こうして、生徒指導と道徳教育は、独自の領域と機能を持ちながらも、一体となって児童生徒の人格形成を目指す。」と述べ、両者の密接な関係性を指摘する<sup>16</sup>。

表1 道徳科において扱われる項目

<b>A 主として自分自身に関すること</b>	
自主、自立、自由と責任	自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと
節度、節制	望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をする
向上心、個性の伸長	自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること
希望と勇気、克己と強い意志	より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること
真理の探究、創造	真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること
<b>B 主として人との関わりに関すること</b>	
思いやり、感謝	思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること
礼儀	礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること
友情、信頼	友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと
相互理解、寛容	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと
<b>C 主として集団や社会との関わりに関すること</b>	
遵法精神、公德心	法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること
公正、公平、社会正義	正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること
社会参画、公共の精神	社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること
勤労	勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること
家族愛、家庭生活の充実	父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと
よりよい学校生活、集団生活の充実	教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること
郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	郷土の伝統と文化を大切に、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること
我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度	優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること
国際理解、国際貢献	世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること
<b>D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること</b>	
生命の尊さ	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること
自然愛護	自然の崇高さを知り、自然環境を大切にするなどの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること
感動、畏敬の念	美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること
よりよく生きる喜び	人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと

出典：「中学校学習指導要領（平成29年告示）」より筆者作成

表2 道徳教育と特別活動の内容の関連性

特別活動の教育内容	道徳教育と関連のある具体的内容	当該内容と関連のある道徳教育の内容
学級活動(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」	学級や学校の生活上の諸課題を見だし、これを自主的に取り上げ、協力して課題解決していく自発的、自治的な活動	生徒による自発的、自治的な活動によって、よりよい人間関係の形成や生活づくりに参画する態度などに関わる道徳性を身に付けること
学級活動(2)「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」	自他の個性の理解と尊重、よりよい人間関係の形成、男女相互の理解と協力、思春期の不安や悩みの解決、性的な発達への対応、心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成、食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成	自らの生活を振り返り、自己の目標を定め、粘り強く取り組み、よりよい生活態度を身に付けようとする事
学級活動(3)「一人一人のキャリア形成と自己実現」	社会生活、職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用、社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成	
生徒会活動		全校の生徒が学校におけるよりよい生活を築くために、問題を見だし、これを自主的に取り上げ、協力して課題解決していく自発的、自治的な活動を通して、異年齢によるよりよい人間関係の形成やよりよい学校生活づくりに参画する態度などに関わる道徳性を身に付けること
学校行事	特に、職場体験活動やボランティア精神を養う活動などの社会体験や自然体験、幼児児童、高齢者や障害のある人々などとの触れ合いや文化や芸術に親しむ体験	よりよい人間関係の形成、自律的態度、心身の健康、協力、責任、公德心、勤労、社会奉仕などにかかわる道徳性の育成を図ること

出典：「中学校学習指導要領（平成29年告示）総則編解説」より筆者作成

それは、「生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法等について、時代の変化に即して網羅的にまとめ、生徒指導の実践に際し教職員間や学校間で共通理解を図り、組織的・体系的な取り組みを進めることができる」ことを目的とした生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書である「生徒指導提要」からも読み取れる<sup>17</sup>。「生徒指導提要」は、「生徒指導とは、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと児童生徒が、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」<sup>18</sup>と定義し、すべての児童・生徒を対象に日常的に行われる積極的な「常態的・先行的（プロアクティブ）生徒指導」と、個別の児童・生徒を対象に課題の予兆のないし初期段階における指導・援助や深刻な課題に対応する「即応的・継続的（リアクティブ）生徒指導」という2軸に分類する<sup>19</sup>。生徒指導と道徳教育の関係については、「いずれも児童生徒の人格のよりよい発達を目指すものであり、学校の教育活動全体を通じて行うという点で共通している」として、特に道徳科との関連から整理を行っている<sup>20</sup>。ここでは道徳教育と生徒指導の関連についてすべての児童・生徒に対する教育という側面が強調されているが、両者の共通性を鑑みると、個別的な生徒指導の場面においても道徳教育も視野に入れた人格の発達に向けた指導が求められる。

宗教系私立学校においては、宗教教育と関連させる形で生徒指導を厳格に行う事例もみられる。小幡は、事例として取り上げた宗教系私立高校の校則が厳しいことについて、宗教科（仏教）の時間に用いられるテキストの内容を引きながら、宗教教育との関係が一定存在するという点を指摘している<sup>21</sup>。生徒指導が宗教教育と関連付けて展開されている宗教系私立学校において、生徒指導と道徳教育の関係がどのような状態にあるのかを検討することが求められるだろう。

これらを踏まえ本稿では、道徳教育の内容を道徳科の教育内容として示されている「4領域 22項目」を軸に検討し、特別活動や生徒指導との関連を、学習指導要領の解説や「生徒指導提要」の記述と比べ

つつ検討していくこととする。

## 2. 洛星中・高における宗教教育と調査の概要

### (1) 洛星中・高における宗教教育の概要

洛星中・高は、キリスト教カトリック系の中高一貫の男子校である。同校のホームページによると、「キリスト教カトリック精神に基づく“全人教育”」を目標として掲げており、「授業、クラブ活動、学校行事、宗教行事などを通じて、心、頭、体のバランスの取れた人間」を育てるとしている。宗教教育に関しては、『人間は神の似姿である』という聖書の言葉をもとに、『互いに愛し合いなさい』というキリストの言葉を通して、人間尊重の精神を養うことを目指しており、宗教科、宗教研究、朝の祈り、学校行事という四つの教育活動が宗教教育として行われている。宗教研究とは、「毎週木曜日の放課後を「宗教研究」の時間とし、生徒たちがそれぞれ関心を持った事柄を、自ら探求し理解を深める時間である。中学1年生は全員参加で学校法人の運営母体である修道会について、ミッションスクールの意義、学校の歴史などを学び、中学校2年生以上は自由参加で、「宗教と文学」「宗教と音楽」「点字教室」などの活動を学年の枠を超えて行っている。朝の祈りとは、1日の始まりにあたって神の恵みを願うものである。校内の小聖堂にて行われており、自由参加となっている<sup>22</sup>。

### (2) 調査の概要

以上を踏まえ、宗教科と学習指導要領に提示された領域である特別活動、そして生徒指導提要においてその関連性が重視されている生徒指導に着目して検討を行う。その検討にあたり、2021年度に洛星中・高の教員2名に対して調査を行った。宗教科の教員である教員Aに対しては宗教科のカリキュラムや方法等について、また道德科との関連などについて質問文を提示し、文書による回答を得た。また、生徒指導を行う生徒部の部長である教員Bに対しては、生徒指導に関する取り組みのほか、教員B自身が長年関わっているクリスマス行事についても聞き取り調査を行った。これら調査と洛星中・高のホームページ、また同校の教員が取材を受けた新聞やウェブサイト等の記事も参考にする。

## 3. 宗教科における道德教育

### (1) 宗教科の教育内容

本章では教員Aからの回答を基に、洛星中・高での宗教科における教育活動を整理する。

同校において、宗教科は中学校において道德科の代替として行われているほか、高校3年生においても学校設定教科として宗教科が週1時間設定されている。目標として「宗教についての正しい理解」「宗教的情操」「キリスト教についての正しい理解」「キリスト教的価値観」「現代社会に対する責任」という5点を掲げている。

中学校のカリキュラムは、1年生ではキリスト教と宗教の基礎知識、キリスト教の人物・生き方について、2年生では新約聖書を通してイエスの教えと生涯や弟子たちとキリスト教会について、3年生では旧約聖書についてその物語と現代について、それぞれ扱っている。「単なる知識ではなく、キリスト教や聖書を、現代の身の回りで考えてみる」ことを重視しているといい、キリスト教の聖書に関する知識だけでなく現代とのつながりも意識した教育が展開されている。高校3年生のカリキュラムは、「科

学と生命、自然科学と生命／社会科学と生命」を大きなテーマとして、「卒業後の進路と選挙権獲得を前提に、『生殖操作』『中絶』『安楽死』『臓器移植』『死刑』『自殺』などといったテーマを扱っている」という。

教材については、担当者が必要なプリントを作成するほか、聖書の資料集といったものを利用し、「知識だけでなく感覚的にも触れることができるように、視聴覚教材も使用する」という。コロナウイルス感染症の流行する近年は、休校に備えて新書クラスのテキストをシラバスに合わせて指定したが、映像などの授業内容との整合性という問題点も抱えているという。また、高校3年生については、実際の裁判をモデルに討論を行い、自分たちの意見について分析を行うといった活動も行われている。

生徒の反応としては、キリスト教系の私立小学校以外の小学校から進学する生徒にとってはキリスト教に関する事項が興味深く映るようで、知識欲が旺盛な生徒がみられるということ述べていた。また、ミサなどの学校行事として行われる宗教行事に対する態度が、他のキリスト教系の学校と比べて優れているのではないかと述べている。

## (2) 道徳科との関連

道徳科との関連づけは、所在県の私立学校行政を所管する部局からの「拘束が緩い」ということもあり、現時点では基本的に行っていないということであった。ただし、道徳の教科化が議論されていた2016年度にカリキュラムとの整合性を検討したことがあるという。文部科学省の作成した教材である「わたしたちの道徳」<sup>23</sup>の目次（4領域 24項目）と洛星中・高の授業の取り組みを対応させる検討を行い、近隣のカトリック系の私立学校と情報交換をした経験があるという。その際、洛星中・高の宗教科のカリキュラムは、24項目すべてと対応していると判断したという。その作業の中では、さらに授業内容を24項目と対応・充実させるために候補となりうるテーマ案も挙げていた。しかし結果的には、先述の通り私学行政からの指導がないためにカリキュラムは従来のものを踏襲しており、道徳科の学習指導要領との整合性を厳密に図るということは現時点でなされていない。

道徳科との対応は必ずしも明確ではないとはいえ、学習指導要領が道徳教育において重視する他教科・領域との関連は一定考慮されている。中学1年生では、宗教ガイダンスやミサ、後述するクリスマス行事などの宗教行事との連携が行われるほか、中学3年生では長崎への研修旅行の事前学習に関する授業を行うといった形で特別活動との関連付けが行われている。

## 4. 特別活動における道徳教育

### (1) 宗教行事としての学校行事

洛星中・高における宗教教育に関わる学校行事としてホームページで紹介されているのは、入学式や卒業式に際して行われ、生徒、保護者、教員に神の祝福を願う儀式である「聖体賛美式」、人間や社会について考える機会の一つとして外部講師を招き行われる「宗教講演会・人権講演会」、「キリストの受難と復活を伝える聖書の朗読を通して、神の愛を思い起こす儀式」である「アガペー」、カトリックにおいて死者の月とされる11月に関係者故人を追悼する「追悼ミサ」、創立記念日に行われる「創立記念ミサ」、クリスマスにキリストの生誕を祝い、聖書の場面を絵画的に表す劇である「クリスマス・タブロー」（以下、タブロー）の6行事である。特にここでは、タブローを取り上げて、長年タブローに関

わる教員 B の聞き取り調査における発言を基に検討する。

## (2) 道徳教育からみたタブロー

タブローとは、キリストの生誕の場面を描いた聖書の朗読を背景に行われる活人画である。中学校 1 年生は全員がキャストや聖歌隊として参加するほか、合計 300 人を超える中学 2 年生から高校 2 年生の有志の生徒が演出、衣装や装置の制作、観客の誘導といった会場運営などに携わるスタッフとして参加する<sup>24</sup>。12 月の定期考査終了後のクリスマス前の 1 週間で装置や道具の作成、練習を行う。特に高校 2 年生を中心として生徒が主体となって運営されており、先輩から後輩へと受け継がれる洛星中・高の伝統の一つとなっている。

タブローには、生徒に対して本来のクリスマスの意味を教えるという意味合いがあるというが、ここでは道徳教育に関する要素として 2 点指摘したい。第一に、この行事自体が持つ荘厳さである。学校ホームページにも「宗教音楽をバックに聖書の場面を絵画的に表した美しく荘厳な劇」とされているように、キリストの生誕を荘厳な形で描くこの劇を見ること、参加することを通して、生徒たちに対して宗教的情操を育むことにつながっていると考えられる。

第二に、責任感を学ぶということが挙げられる。伝統的な行事に対して、教員 B は教員の基本的な姿勢として、「見守っている」と述べた。スタッフとして活動する生徒たちは演出や衣装などのパートに分かれており、高校 2 年生のチーフを中心に各パート内で上級生が受け継がれてきた仕事を行い、そして下級生に伝えている。そのような伝統が存在している中で、関わる教員は安全面での指導は行うが、それ以外の場面では生徒に「任せているところがすごく多い」という。

基本的に（タブローを成功させるという：引用者補足。以下、括弧内同じ）目的はみんなある、一つ。「ちゃんとやるぞ、今年も」っていう。そこは一つすごく（生徒たちみんなが）向いてるので、それでちゃんと成り立ってる。逆に、こっちが指導しとったら続かへんやろうなと思ってるんです。

生徒たちが伝統として受け継いできた行事を成功させるという目的に向かって活動しているので、教員はあくまで見守る。その結果、生徒たちには責任感が出てくると述べる。

とやかく言われないうことは、君らでちゃんとやんねんな、っていう（意味だと理解して）、任されてる感、信頼されてる感とか（を生徒たちは感じ取る）。それゆえに発生する責任感。もちろん中学生からだんだん高校生、チーフとかなったら当然出てきますよね。

このようなタブローは、学習指導要領が想定する学校行事のうち、「儀式的行事」や「文化的行事」、「勤労生産・奉仕的行事」といった複数の学校行事の要素を持つものである。その中で、4 領域 22 項目のうち特に「自主、自立、自由と責任」や「感動、畏敬の念」といった要素を中心として、道徳教育につながっている活動だといえる。



## 5. 生徒指導における道徳教育

洛星中・高では、「静粛」「時間厳守」「礼儀」「美化整頓」「公共心」という5項目からなる生徒心得を定めている(表3)。これは、「社会の一員として生活していく上で、必要不可欠な心がけが常にできるようにします。本来、できて当たり前のことが自然にできる、ということがいかに大事なことなのかを理解し、実行できるようにします。」<sup>26</sup>という意図で定められており、学校生活全体を通して生徒にこの心得を守ることを求めている。

こういった心得が定められている中で、実際指導を行う立場として教員Bが最も重要だと考えているのは、他の4項目の土台として示されている「公共心」だという。

ある意味(学校外の方から)指導、意見いただくっていうことは(中略)期待されているんだろうなって思うことに私はして。つまり「うちの学校(洛星中・高)だったらこうあるべきだよな」というのが何かしらお持ちで、みんな、で、それがやっぱちょっと不行き届きなところがあるから、言うてもうてんねやろな(中略)他者との関わりで、相手のことちょっと配慮してとか。それはもちろん、同級生もそうだし、先輩後輩もそうだし。あとたまたま周りで一緒に電車乗ってる人、関わる人含めて。その辺はすごくやっぱり、意識はしてる、(生徒に)言うてるなって気はします。

学校生活を共に過ごす仲間に対してだけでなく、通学時の電車やバスなどはまさに公共の場であり、そのような「たまたま」一緒になった外部の人に対して配慮し、迷惑をかけないということを指導していこうとする。こういった点は、道徳科の「主として集団や社会との関わりに関する事」の項目と大きくかかわっているといえる。

また教員Bは、校長<sup>26</sup>が生徒に向けてよく話す「人の痛みに気づける人になりなさい」という言葉を自らも用いて指導するという。この言葉については、校長が入学式の式辞において、「神は、ご自分に似せて人間を創られました。では、どこが神様と似ているのでしょうか(中略)人のことを思い遣ることができる優しい心が似ているのです」<sup>27</sup>と発言していることから、キリスト教の教えを踏まえた発言であるといえる。こういった考えが生徒指導の文脈においても生きていくということが、宗教教育が生徒指導において反映されていることの表れと読み取れる。

また、生徒に考えさせることで、自律性を身に付けることにつながっていることも指摘できる。タブ

表3 洛星中・高の生徒心得

静粛	校内では静粛を守ること。静粛は理想的な学校生活をおくる基礎になるものであり、学習に精神を集中させるためにも必要なものである。
時間厳守	学校の内外を問わず、いかなる場合にも時間を厳守すること。時間厳守の習慣は社会生活の根底をなすものであり、規則正しい生活をおくるためにも欠くことのできないものである。
礼儀	常に礼儀正しくすること。礼儀は自己の人格の表れである。礼儀は一つの形式をとって表されるものであるが、形式だけのむなしいものにならないように、いつも他人に対して尊敬・親切・協力の心を保つことが大切である。
美化整頓	常に校内の美化整頓に心掛けること。自分たちの環境を常に清潔にしておくことは学習にふさわしい雰囲気を作るために必要である。
公共心	学校の内外を問わず公共心を重んずること。公共につくす精神は、社会生活における個人の最小限の義務であり、上記の4項目を守るためにも絶対に必要なものである。

出典：洛星中・高ホームページより筆者作成

ローが生徒主体で運営されていたように、洛星中・高は自由な校風であるとされる。その中で教員Bは以下のように洛星中・高の生徒指導の特徴を捉えている。

上から「わー」っていう人（教員）がそんなに多くない気がしますね。何か指導するときとかでも。「まあ話聞こか」いうところから「うんまあ、なるほどそやな。そやけどどうや」っていう感じで。

教員が生徒との対話を重視し、尊重する姿勢がみられる。そういった校風も宗教的な教えが背景にある。ウェブサイトにおける洛星中・高の紹介記事において、他の教員が「さまざまな行事や授業を通して自然に生徒たちにもカトリックの精神が伝わっているので、生徒指導をするにしてもルールで縛るのではなく、カトリックの教えをもとにして生徒と話ができて通じ合えることがこの学校のいいところだと思います」<sup>28</sup>と発言していることから、宗教的な信条が生徒指導に影響しているといえる<sup>29</sup>。

## 6. 考察

これまで検討してきた、洛星中・高における教育活動と道德教育の関連を、道德科の教育内容との対応から整理すると表4ようになる。宗教科の授業では、意図はしていないものの道德教育の内容を踏まえた内容になっているということがいえる。特別活動では、タブローを通して宗教的情操や、「よりよい人間関係の形成、自律的態度、心身の健康、協力、責任、公德心、勤労、社会奉仕などにかかわる道德性の育成」という学習指導要領解説において学校行事を通して育成が期待される道德性を養うことにつながっている。生徒指導においては、「人の痛みに気づける人になりなさい」という宗教的な教えと生徒心得において掲げる公共心という考え方が相まって、指導が行われていた。

洛星中・高における宗教教育と道德教育のかかわりを踏まえ、以下の2点を指摘したい。第一に、道德科が置かれておらず、その代替として宗教科が置かれている学校においても、宗教教育を通じた道德教育が十分に展開されていることが示唆されたという点である。宗教科においては、今次の学習指導要領で提示された4領域 22項目との整合性を検証しているわけではないものの、概ね道德科の内容と対応する形で、カリキュラムが構成されているということが明らかになった。また、宗教科における知識の獲得が特別活動など他領域において展開される宗教教育の充実に影響を与えているということも示唆された。道德教育の代替性を重視して展開されているわけではない私立学校における宗教教育が、道德教育の役割を十分に果たしているということがいえるだろう。

表4 学習指導要領の道德科の教育領域と洛星中・高の教育活動の対応

	A 主として自分自身に関すること	B 主として人との関わりに関すること	C 主として集団や社会との関わりに関すること	D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
宗教科	◎	◎	◎	◎
特別活動	○			○
生徒指導	○	◎	○	

◎：概ね領域内のすべての項目が該当する、○：領域内の一部の項目が該当する

出典：筆者作成

第二に、道徳教育が宗教教育を介して展開されることによって、学校教育全体での道徳教育の充実がみられるという点である。道徳教育においては先にも触れたとおり、学習指導要領において、道徳科を要として学校教育全体において推進することが求められている。このようなカリキュラム・マネジメントの視点を持った道徳教育は、大きな困難を伴うともいえる。貝塚が指摘するように、「道徳科の学びと各教科、特別活動、総合的な学習等での学びが有機的に結び付き、相互補完的に構造化されなければ、『深い学び』が達成されることは難しい」し、また「道徳教育と各教科での学びを性格の違う別々のものとして捉える傾向が強い」<sup>30</sup>日本の学校教育を考えると、困難が伴うものであるといえる。そのような中で貝塚は、天野貞祐の「知識の習得それ自体が、徳性（道徳性）を持つ」という議論を紹介しつつ、知識それ自体の道徳性を考えることの重要性を紹介している<sup>31</sup>。洛星中・高の宗教科では、現代社会に関するテーマと合わせて直接的にはキリスト教に関する知識を教授しているが、それを通じて道徳性を育むことにつながっているという点で、知識と道徳が一体となった道徳教育が展開されているといえる。また、学校教育全体で宗教教育が展開されている洛星中・高において、宗教科における学びがミサなど宗教的な学校行事への参加の意欲や態度を高めているという点で、宗教科を要とした学校教育全体での宗教教育が実現しているとみることができよう。

## 結

本稿では、道徳科を宗教科で代替する私立学校において、道徳教育がどのように行われているのかを洛星中・高の事例を基に検討した。洛星中・高では、宗教科において、宗教的情操や価値観などの道徳教育だけでなく宗教に関する知識を学ぶということを目標として設定していた。そのことによって生徒の関心が高まり、他の宗教行事への熱心な参加につながっている。また、道徳教育が特別活動などの他領域や生徒指導などの学校教育全体において宗教教育と関連した形で行われている様子も見受けられた。従来私立学校の宗教教育については、生命の尊重や国際理解といった道徳教育の特定の内容を取り上げてその実態を検討する研究に限られていた。その中で、本稿は宗教系私立学校において、道徳科が宗教科に代替されていても、道徳科学習指導要領から逸脱することない教育内容を通して道徳性を養うことができているということを示すことができた。また、先行研究では宗教的情操を教育する点にその特徴を見出していたが、宗教に関する知識を教育するという点が充実した道徳教育につながっていることも指摘できた。

本稿に残された課題として2点指摘する。第一に、洛星中・高以外のより多様な事例の検討が必要だということである。例えば、小幡が取り上げていた校則の厳しい学校とは異なり、洛星中・高は比較的自由的な校風が特徴である。洛星中・高が男子校のいわゆる進学校であるということや、キリスト教カトリックの修道会を母体としていることなど、そういった特徴を踏まえて事例の比較を積み重ねていくことも必要だろう。第二に、担当教員への調査による検討にとどまった点である。教員の意図や視点だけでなく、生徒の受け止めを検討することも、宗教教育が道徳教育をどのようにカバーしているのかを明らかにする上では重要だと考えられる。これらの課題については今後の検討課題としたい。

## 注

- 1 貝塚茂樹『『特別の教科 道德』の成立とその意義』日本道德教育学会全集編集委員会・押谷由夫・貝塚茂樹・高島元洋・毛内嘉威編『道德教育の変遷・展開・展望』新道德教育全集、第1巻、学文社、2021年、79-88頁。
- 2 板倉栄一郎「私立中学校・高等学校における道德教育の取組」日本道德教育学会全集編集委員会・柴原弘志・七條正典・澤田浩一・吉本恒幸編『中学校、高等学校、特別支援学校における新しい道德教育』新道德教育全集、第4巻、学文社、2021年、205-206頁。
- 3 李愛慶「宗教科教員の葛藤に関する研究—キリスト教系学校の宗教科教員の語りから—」『日本教師教育学会年報』第30号、2021年、136-146頁。
- 4 神垣しおり『『道德教育』と国際理解教育—私学中高一貫校における宗教教育の観点から—』『国際理解研究』第22号、2016年、71-77頁。
- 5 同上、71頁。
- 6 小幡啓靖「学校の評価、選択、経営に関する研究—宗教系私立学校におけるアンケート調査の結果から—」『東京大学教育行政学研究室紀要』第14号、1994年、39-54頁。
- 7 筆者は、2021年度に洛星中・高の非常勤講師として1年間勤務していた。
- 8 小入羽秀敬『私立学校政策の展開と地方財政—私学助成をめぐる政府間関係—』吉田書店、2019年、15頁。
- 9 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年度告示）」2019年。
- 10 同上。
- 11 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年度告示）総則編解説」2019年。
- 12 文部科学省、前掲指導要領、2019年。
- 13 森一郎「公立学校に置ける『宗教的情操教育』の可能性と課題」『教育学論究』第6号、2014年、221頁。
- 14 小幡啓靖『『宗教的情操』の教育に関する一考察—宗教系私立学校の宗教教育をめぐる実践・学校選択・評価の事例から—』『東京大学教育行政学研究室紀要』第13号、1993年、75-102頁。
- 15 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年度告示）総則編解説」2019年。
- 16 豊泉清浩「生徒指導と道德教育の関連性に関する一考察」『群馬大学教育実践研究』第29号、2012年、138頁。
- 17 文部科学省初等中等教育局児童生徒課「新『生徒指導提要』ポイント解説」『教職研修』2022年12月号、教育開発研究所、2022年、20-22頁。
- 18 文部科学省「生徒指導提要（改訂版）」2022年、12頁。
- 19 同上、18-19頁。
- 20 同上、49頁。
- 21 小幡、前掲論文、1994年、39-54頁。
- 22 洛星中学校・高等学校ホームページ（<https://www.rakusei.ac.jp/curriculum>、最終確認日 2022年11月25日）。
- 23 平成20年度改訂の中学校学習指導要領で提示されている道德の時間の教育内容を基に構成されている。
- 24 全員参加でないという点で、タブローを特別活動とすることに問題があるといえるかもしれない。しかし、中学校1年生では全員が参加するという点（洛星中・高は中学校のみ生徒募集をしており高校からの入学者は募集していないため、在校生全員が参加したことがあることになる）、また学校側も年間行事として位置づけていることを踏まえ、本稿では特別活動（学校行事）とみなして取り上げる。
- 25 洛星中学校・高等学校、前掲ホームページ。
- 26 洛星中・高の歴代校長は、これまでカトリックの聖職者や信者が就いている。
- 27 洛星中学校・高等学校「Rakusei NEWSLETTER」No.1、2017年4月10日。
- 28 おおたとしまさ「名物行事『クリスマス・タブロー』で洛星生が学ぶ美学」NIKKEI STYLE、2021年2月7日（<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO68592620Y1A120C2000000/?page=3>、最終確認日2022年11月25日）。
- 29 ここでいう「カトリックの教え」とは、おおたの記事において校長が「キリスト教の考えでは、あなたは望まれてこの世に生まれて、存在自体に価値があるとされています。何かができるから価値があるのではなく、無条件に価値があるのだと解釈します」と述べていることから、このような個人を尊重するという思想のことを指していると考えられる。
- 30 貝塚茂樹『新時代の道德教育—「考え、議論する」ための15章—』ミネルヴァ書房、2020年、142頁。
- 31 同上、143頁。

## **Moral Education through Religious Studies, Special Activities, and Student Guidance in Private Religious Schools:**

Based on Examination of Courses of Study and Case Studies

Yoshimasa MATSUMOTO

As moral education has been strengthened in the Courses of Study, private schools have replaced the moral education course with a religion course. In such private schools with religious studies, the extent to which religious education realizes moral education has not been examined. The purpose of this paper is to clarify the relationship between religious education and moral education demanded by public education in private religious schools. After organizing the contents of the Courses of Study regarding moral education, a case study was conducted at Rakusei Junior and Senior High School, which is based on a Christian Catholic congregation. Specifically, we examined the development of moral education at Rakusei from the perspectives of religious studies, special activities, and student guidance. The lesson content of the religious studies course fulfilled all of the educational content of the moral education course, although it had not intended to do so. In special activities, it was found that the solemnity of the religious events was awe-inspiring, and furthermore, education was conducted in an attempt to instill a sense of responsibility. In student guidance, autonomy was seen to be fostered through a form of guidance that emphasized public spirit and respect for the individual, while also being grounded in Christian teachings. Based on these results, it is clear that religious education generally replaces moral education unintentionally, and that moral education through religious education contributes to the realization of moral education throughout the entire school curriculum.